

注：本メモは、北海道SDGs推進懇談会の各委員から出された提言・意見を、各委員の協力を得て吉中厚裕（同懇談会座長）の責任で整理したものです。出された提言・意見の全てが網羅されているものではなく、またその内容全てについて同懇談会委員の間でコンセンサスが得られているものでもありません。

2018年8月24日

## 北海道SDGs推進懇談会委員からの提言・意見とりまとめメモ

### 「ビジョン」の必要性

- ・ 北海道総合計画と同じ内容、同計画を前提・ベースとして考えるなら不要。
- ・ 策定するのであれば、SDGsの理念、要素を踏まえるべき。
  - 「誰一人取り残さない（最も遅れているところ、脆弱な立場に置かれている人に手を伸ばすべき）」
  - 「経済、社会、環境の調和」
  - 「バックキャストイング」
  - 「人権ベース」
  - 「同時解決・統合的アプローチ」

### 策定スケジュール

- ・ 現行スケジュールでは透明で多様な主体参加型の議論を十分に行えないことから、スケジュールを見直すべき。
- ・ どうしても今年中に策定する必要があるのであれば、「ビジョン」の性格・内容・項目等について再検討すべき。

### 策定プロセス

- ・ 多様なステークホルダーの関与が必須。
- ・ 意見・情報収集、計画策定、事業立案・実施、評価、全てのプロセスにおいてジェンダーの視点を取り入れるとともに、脆弱な立場におかれている人々、特に先住民族（アイヌ民族）の参画を保障し、その視点を取り入れるべき。
- ・ ステークホルダー毎のビジョン提案ワークショップを開催するなどして、できる限り多様なグループの意見を「ビジョン」に反映させること。
- ・ 「透明で多様な主体参加型の議論」を十分に行わずに策定する場合には、「ビジョン」が不十分なプロセスで策定されたものであること、策定後は多様なステークホルダーの参画を得て随時更新していくことを明記すべき。
- ・ また、基礎自治体や北海道全域のステークホルダーの意見をどのように反映させるのか明記すべき。
- ・ 「官民一体」「地方創生」といった用語は本文脈では不適切。

### 「ビジョン」の名称

注：本メモは、北海道SDGs推進懇談会の各委員から出された提言・意見を、各委員の協力を得て吉中厚裕（同懇談会座長）の責任で整理したものです。出された提言・意見の全てが網羅されているものではなく、またその内容全てについて同懇談会委員の間でコンセンサスが得られているものでもありません。

- ・ 2030年を目標年とした場合「推進」している余裕はなく、「達成」を目指すべき。名称からも「推進」を削除、あるいは「達成ビジョン」へと変更すべき。
- ・ 策定しようとしているものは「めざすべき姿=ビジョン」なのか、SDGs達成のための「推進方策」なのか、位置づけの明確化が必要で、それに応じて名前も検討すべき。

### 「ビジョン」の役割・性格

- ・ SDGsの核となる要素を取り入れるべき。
  - 「誰一人取り残さない（最も遅れているところ、脆弱な立場に置かれている人に手を伸ばすべき）」
  - 「経済、社会、環境の調和」
  - 「バックキャストिंग」
  - 「人権ベース」
  - 「同時解決・統合的アプローチ」
- ・ 現行の策定プロセス・スケジュールでは「道内の多様なステークホルダーが互いに共有する基本的な指針」とはなり得ない。
- ・ そもそも策定しようとしているものは「めざすべき姿=ビジョン」なのか、SDGs達成のための「推進方策」なのか、位置づけの明確化が必要。「骨子案」の構造そのものをもし変えられないとしても両者の書き分けは可能ではないか。
- ・ SDGsについて全く知らない人々にまずは知ってもらうことが重要。わかりやすく伝え、自分のことと捉えてもらえるきっかけとなることが必要。0から1にする取り組みを。
- ・ 「4. ビジョンの推進（1）各ステークホルダーの取り組み」は、その策定プロセスに各ステークホルダーの十分な参画が保障されていない現状では削除すべき。むしろ、各ステークホルダーに自分自身の興味関心がどこにあるのかSDGsを基に整理していくことを促すような文言を追記すべき。
- ・ 「ビジョン」達成に対する各主体の「責任」及び「変革すべき点」を明確にすべき。そのためには各主体の参画のもと実質的な議論が必要。
- ・ 北海道がグローバルな目標に寄与すべき事項を明確にすべき。
- ・ 北海道庁の各施策にSDGsの核となる要素を組み込んでいくことが必要。
- ・ 基礎自治体の「参画型」SDGs関連施策策定のための支援方策（技術・財政）を明記すべき。
- ・ ジェンダーについては、ステークホルダーとしての「女性」だけでなく、SDGs全体の横串となるものでもあるという認識・記載が必要。

### ステークホルダー

- ・ 「誰一人取り残さない」ために、国連の「メイジャーグループ・その他のステークホル

注：本メモは、北海道SDGs推進懇談会の各委員から出された提言・意見を、各委員の協力を得て吉中厚裕（同懇談会座長）の責任で整理したものです。出された提言・意見の全てが網羅されているものではなく、またその内容全てについて同懇談会委員の間でコンセンサスが得られているものでもありません。

ダー」をベースとし、北海道において特に配慮すべきグループ、脆弱な立場に置かれているグループをステークホルダーとして明記すべき。

- 農村・農業者
  - 先住民族
  - 行政（基礎自治体）
  - 科学コミュニティ
  - 子ども・若者
  - 女性 等
- ・ 多様なステークホルダーとの連携・協働（意見交換、政策協議、計画策定、事業立案・実施、評価等全てのプロセスにおいて）の方策について具体的に明記すべき。

### 優先課題

- ・ 「めざす姿=ビジョン」を「世界の中で輝き続ける北海道」とすることは2030アジェンダの理念と合致しない。本来の意味での「ビジョン」については、2030アジェンダの「私たちのビジョン」をベースとして今後多様なステークホルダーと協働しつつ策定していくべき。そのためには十分かつ広範な議論が必要。今もしキャッチフレーズが必要であれば「誰一人取り残されない北海道」といったものではないか。
- ・ 解決すべき課題の根底原因を探り、それを優先課題とすべき。
- ・ 過去・現在・未来における課題を直視し、脆弱な立場に置かれている人々を優先的に取り上げるべき。
- ・ SDGsの17項目毎に北海道の抱えている課題を抽出・整理すべき
- ・ 恣意的に設定した「優先課題」にSDGsを紐付ける様態では目標間の繋がり・統合的アプローチが明確にならない。そもそも「優先課題」の設定は必要なのか。
- ・ 「世界に誇れる北海道の価値と強み」項目は不要。むしろ「弱み」について正しく分析、認識すべき。
- ・ 「北海道の強み」についても「弱み」と合わせて検討すべき。
- ・ 「強み」を伸ばすよりも専門家や実践している人たちが把握しているデータ・知見を駆使し「取り残されている存在」を把握し、「最も遅れているところ」への対処こそが優先課題であるべき。
- ・ 必要なのは「持続可能な経済成長」ではなく「持続可能な経済」ではないのか。
- ・ ステークホルダーごとにSDGsの目標との関連性を示すことが有効ではないか。「めざす姿」の実現のために自分自身の興味関心がどこにあるのかSDGsを基に整理していくことを促すような文言を追記すべき。

### 「行動計画」の策定

注：本メモは、北海道SDGs推進懇談会の各委員から出された提言・意見を、各委員の協力を得て吉中厚裕（同懇談会座長）の責任で整理したものです。出された提言・意見の全てが網羅されているものではなく、またその内容全てについて同懇談会委員の間でコンセンサスが得られているものでもありません。

- ・ 「ビジョン」達成のための戦略、行動計画を策定し、その達成に至るまで随時見直しを行っていくべき。
- ・ 策定に当たっては、多様なステークホルダーの参画を得て協働することが必須（「ビジョン」策定プロセスの失敗を繰り返さない）。そうでなければ実効性が期待できない。

### **進捗モニタリング・評価**

- ・ 各ステークホルダーが継続的に情報を入手し、チェックできる体制を作ることが必要。
- ・ 多様なステークホルダーと協働の上、2019年度末までに「ビジョン」における指標を策定し、その後の進捗管理を行う体制を構築すべき。
- ・ 既存の道庁が用いている指標だけでは不十分。道庁以外の知見も活用すべき。
- ・ 指標の検討と平行して広く道民を対象として「ビジョン」の説明、意見徴収・意見交換を各市町村と連携しつつ行うべき。
- ・ 透明性・説明責任の観点からも専門性のある多種多様な視点による継続的なモニタリング・評価が行われる体制を作るべき。
- ・ SDGs達成のためのネットワークとしては、道が立ち上げ募集を開始した「推進ネットワーク」と「RCE北海道道央圏」との協働が重要。両者の役割分担、具体的な協働体制等について書き込むべき。

（文責 吉中厚裕）